

いもせやまおんなていきん

妹背山婦女庭訓

〔解説〕明和八年（一七七七）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあつた作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのです。

〔あらすじ〕三輪の杉酒屋の娘お三輪は、烏帽子折の求馬（もとめ）〔実は鎌足の子、淡海〕に想いを寄せますが、求馬のもとに恋人橘姫が尋ねて来ます。求馬は、姫の後を追って三笠山の御殿にたどり着き、橘姫が入鹿の妹であることを知ります。求馬を追ってきたお三輪は、入鹿の御殿に入り込みます。求馬と橘姫の婚礼が行われると聞き嫉妬に駆られたお三輪は、女中たちにもいたぶられ益々逆上します。そのお三輪を漁師鱈七（ふかしち）に姿を変えて御殿に入り込んでいた鎌足家臣金輪五郎が刺し、入鹿を討つには嫉妬に狂った女の血が必要であり、お三輪のその血が愛しい求馬の役に立つことを言い聞かせます。お三輪は来世で求馬と添うことを願いながら息絶えるのです。

金殿の段

れてぞ忍ばるる。

迷ひはぐれしかた鶴、草の靡くをしるべにて、いき
せきお三輪は走り入り、

「エ、この芋環の糸めが切れくさったばかりで、道
からとんと見失うた。さりながらここより外に家は
なし。大方この内へはいつたに違ひはない。エ、誰
れぞ来よかし。問ひたや」

と見遣る先より、おはしたが被^{かつぎ}まぶかに、しやな
くくと豆腐箱提げ歩み来る。

「もうし〜」

と呼びかくれば、オット呑み込み早合点。

「オ、お清所尋ぬるのなら、そこをこちらへかう廻
つて、そっちゃんの方をあちらへ取り、あちらの方を

そちらへ取り、右の方へ入って、左の方を真直ぐに
脇目もふらずめつたやたらにずっと行きや」

「イエ〜私が尋ねるのは、お清どのとやらではご
さんせぬ。年のころは二十三四で色白にくつきりと
した好い男は参りやせなんだかえ」

「オ、〜〜〜来たげな。来たげな。それはアノ
お姫様の恋男ぢやげなの。三輪の里から路追うて来
たところを、なにがお局たちが引つ捕へ、有無を言
はせず御寢所へぐつと押し込み、上から蒲団をかぶ
せかけ〜、ア、〜、宵の中内証の御祝言がある筈
と、暮れぬ内から騒いでぢや。エ、けなり、こちと
まで内太股がぶき〜と、卯月あたりの弾け豆。豆
腐の御用が急ぐに」
と喋り廻つて、出でて行く。

「サア〜ひょんなことが出来てきた。ほんに〜

油断もすきもなるこつちやない。大それた人の男を盗みくさつて、何ぢやいしこらしい内祝言ぢや。余りな踏み付けやう。よい／＼。ドレその代りどこに居ようと尋ね出し、求馬様と手を引いてこれ見よがしにいで退けるが腹いせぢや」

と行かんとせしが、

「イヤ／＼はしたない者ぢやとひよつと愛想をつかされたら、と言つてこのままに見捨てゝこれがどう往なれう。エ、どうせうぞ」

と心も空。登るきざはし長廊下、行き交ふ女中が見咎めて、一人が留むれば二人立ち、三人四人いつの間、友呼ぶ千鳥むら／＼と、こゝかしこから寄りたかり、

「ついい見馴れぬ女子ぢやが、そなたは誰ぢや。何者ぢや」

「ハイ／＼、イヤ私は内方の、オ、それよ、さつきのお清殿は寺友だち、奉公に出られてから久しう逢はぬなつかしさ。ちよつと見舞に寄りましたら、これはマア／＼よう来た。上がれ、茶々吞め、さうしてアノ煙草のめ、アノお上にはあゝ滅相な御祝言があると聞けば聞くほど涙がこぼれて、あたおめでたい事ぢやげな、ほんに内方の様なよい衆の御祝言はどの様なものぢやおのれやれ拝んでなり、腹癒よと、うか／＼こゝまで参りました。どうぞお前方のお心で、その賀様をちよつと拝ましてもらうたら忝うござります」

と言ふ顔も恨み色なる紫の、ゆかりの女とはや悟り、『なぶつてやろ』と目引き、袖引き、

「マア／＼そちは仕合せな。かういう折に参り合せ、お座敷拝むという事は、女の身では手柄者だが

こちらが呑み込んでお座敷へ出すものゝなんぞさゝずばなるまいな、何と皆さん、いつそのことこの者に酌取らそではあるまいか」

「よからう／＼」

「ア、もうし、その酌とやらは」

「オ、何のまたそちたちが知つてよいものか。いまこゝで教へてやろ。幸ひこゝに御酒宴の銚子島台。あり合ひの賀君さまには紅葉の局。梅の局は嫁君役。残りはかいぞへ待ち女郎」

と桜の局が指図して、いやがるお三輪に、長柄の銚子持たせ、持ち添へ。

「マア盃は三つ重ね。嫁君へ二度ついで、左へ二足。コレ立つのぢや。エ、何ぢやいの。うか／＼せずとよう覺や。三度目ついで賀君へ。コレ酒がこぼれるわいのう。不調法な。サこれからが乱酒謡ひ物。こ

れも嗜みなければならぬ。サア四海波しかいなみなと謡やいの」

「エ、」

「エ、とはいやか。そんなら賀さま拝ます事はマアならぬ。サそれがいやなら早う謡や」

とせき立てられ。

「これがマア何と千秋万歳の」

千箱ちはこの玉の血の涙声詰らせてないじやくり。

「オ、めでたう哀れに出来ました。色直しにはんなりと、梅が枝でも露組でもサア／＼聞きたい。所望ぢや、／＼」

「エ、あられもない事おっしゃりませ。山家育ちの藪鶯、ほう法華経も片言ばかり。上り下りの仇口や、馬士まじの唄なら聞いても居よう。もう何事もお赦しなされ。サ早うその賀さまに」

「サア賀さまが見たくば早う謡や。馬子の唄なら面

白からう。序でに振りも立ってしや。いやならこつちもなりませぬ。帰りや／＼」

と引き出され、

「サア／＼／＼何のいやと申しませう」

「サそんなら謡や」

「アイ／＼／＼謡ひまする」

と泣く／＼も、涙にしぶる振り袖は、鞭よ、手綱よ、

立ち上り、

「竹にサ、雀はナア、品よくとまるナ、とめてサと

まらぬナ、色の道かいなア、ヨ、エ、ここなほてつ

腹め、とこの様に申しまする」

と打ち伏せば、皆みな一度に手を打って

「さてもきつい嗜み事。よい慰みで我れわれが、ほ

てつ腹までよれました。馬子どの大儀」

と言ひ捨てゝ行くを、驚き、

「コレもうし、私もともに」

と取り縋れど、ふり離されてがばとこけ、寝ながら裾にしがみ付き、引きずられて、声を上げ、

「なう皆さん、お情ない。どうぞ私も御一緒に連れてござって下さりませお慈悲、／＼」

と手を合はせ、拝み廻るを叩きのけ、

「オ、しつこ、とても及ばぬ恋争ひ。お姫様と張り合ふとは、かなはぬ事ぢや、置いてたも、大胆女のしつけをせう」

と耳を引くやら、脇明けより手を指し入れてこそぐるやら。つめりつ、叩いつ、突倒し、

「サア／＼これで姫様の愠気の名代納った。いよいよめでたい御祝言、三国一ぢや。聲を取り済ました。しゃん／＼、しゃんと済んだ」

と打ち笑ひ、局々へ入る跡は、前後正体泣き倒れ、

暫し消え入り居たりしが、

「エ、胴慾ぢや／＼胴慾ぢやわいのう。男は取られその上にまたこの様に恥かゝされ、何とこらへて居られうぞ。思へば／＼つれない男。憎いはこの家の女めに見かへられたが口惜しい」

と袖も袂も喰い裂き／＼、乱れ心の乱れ髪。口に喰ひしめ身を震はせ

「エ、妬ましや、腹立ちや、おのれおめ／＼寝ささうか」

と姿心もあらあらしく駈け行く向ふに、以前の使者「オ、そなたも邪魔しに出たのぢやな、もうかうなつたら誰が出ても構はぬ／＼。そこ退きや」

と袖すり抜けてかき入る裾、しっかと踏まへ、

「コリヤ待て女」

「イヤ待たぬ、ここ放しや／＼」

と身をもがく。たぶさつかんで氷の刃、脇腹ぐつと

差し通せば、『うん』とのつけに倒れ伏す。刀つき捨て辺りを窺ひ、目を配る。奥は豊かに音楽の、調子も秋の哀れなり。お三輪はむつくりと起き返り

「さては姫が言ひ付けぢやな。エ、むごたらしい、恨みはこちからあるものを却つてそちから殺さする。心は鬼か蛇かいやい。オ、殺さば殺せ。一念の生きかはり死にかはり、付きまとうてこの恨晴らさいで置かうか。思ひ知れや」

と奥の方、睨め詰めたる眼尻も、叫ぶこわねもうはがれて、さもいまはしきそのありさま。じろりと見やり、

「女悦べ。それでこそ天晴れ高家こうけの北の方。命捨てたる故により、なんぢが思ふ御方の手柄となり入鹿を亡なげす術の一つ。ホ、ウ出かしたなア」

「なんと賤しいこの身を北の方とは」

「ムホ、ウそちが語らひ申せし方は忝くも中臣の
長男淡海公」

「エ、シテまた私が死ぬるのがいいとお方の手柄
柄になって、入鹿を亡ぼす術とはえ」

「ホ、その訳語らん。よつく聞け。彼れが父たる
蘇我の蝦夷子。齡傾くころまでも一子なきを憂へ、

時の博士に占はせ、白き牝鹿の生き血を取り、母に
与へしその驗しるし。健かなる男子出生。鹿の生血胎内

に入るを以て入鹿と名付く。さるによつてきやつが
心をとろかすには、爪黒の鹿の血汐と疑着の相ある

女の生血、これを混じてこの笛にそゝぎかけて調ぶ
る時は、実に秋鹿の妻恋う如く、自然と鹿の性質顯

はれ、色音を感じて正体なし。その虚を計つて宝劔
あやまちなく奪ひ返さん鎌足公の御計略。物蔭より

窺ひ見るに、疑着の相ある汝なれば、不便ながら手
にかけし」

と件の笛の六穴に、たばしる血汐受け濯ぎ受け濯ぎ、
「いまこそ揃ふこの幻術。この笛こそは入鹿をひし
ぐ火串ならん。ハ、ありがたや」

と押戴き、いさみ立つたるその骨柄、げに藤原の御
内にて金輪五郎今国と鍛へに鍛へし忠臣なり。

「のう冥加なや。勿体なや。いかなる縁で賤しずの女が
さうしたお方と暫しでも、枕かはした身の果報、あ

なたのお為になる事なら、死んでも嬉しい、忝い。
とはいふものゝいま一度、どうぞお顔が拝みたい。

たとへこの世は縁薄くと、未来は添ふて給はれ」
と這ひ廻る手に苧環の

「この主様には逢はれぬか、どうぞ尋ねて求馬様も
う目が見えぬ、なつかしい、恋しや／＼」

といひ死にゝ、思ひの魂の糸切れし。小田卷塚と今の世まで、鳴り響きたる横笛堂の因縁かくと哀れなり。今国ふびんいや増しに、

「せめて葬り得ません」

と背なにお三輪がなきがらを、おい／＼駈け来る荒しことも、

「曲者やらぬ」

と追つとりまき、

「ヤア手取りにせよ」

とどつと寄る。当るを幸ひ、砂石の如くほり飛ばされ、逃げ行く奴ばら余さじと、奥深くこそ

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。